

令和3年度第1回自立支援協議会こども部会 議事要旨

1. 開催日時 令和3年9月2日(木)午後1時30分～午後3時30分(非公開)
2. 開催場所 オンライン
3. 出席者 (委員)*団体名のみ記載

教育研究センター、こども発達センター、浦安市肢体不自由児・者親の会「どっこらしょ」、浦安市自閉症協会、浦安手をつなぐ親の会、(福)パーソナル・アシスタンスとも、(福)佑啓会、(特非)かぷあ、(特非)発達わんぱく会、スフィンクス(株)、スマートキッズ(株)、千葉県立市川特別支援学校、千葉県立船橋夏見特別支援学校、千葉県立浦安南高等学校、浦安市立小学校長会、浦安市立中学校長会、こども家庭支援センター(事務局)障がい事業課、障がい福祉課

4. 議事次第

1. 開会
2. 自己紹介
3. 議題
 - (1) 令和3年度・4年度の自立支援協議会の組織と運用について
 - (2) こどもへの支援に関する課題について
 - (3) 令和3年度こども部会の運営とゴール設定について
4. 閉会

5. 配布資料

- 議題(1)資料1 浦安市の課題と解決に向けて
議題(1)資料2 令和3年度・4年度浦安市自立支援協議会の組織と運用
議題(2)資料1 こどもの支援に関する課題について
参考資料 ライフステージごとの支援

6. 議事概要

- (1) 令和3年度・4年度の自立支援協議会の組織と運用について

■説明(事務局)

令和3年度・4年度の協議会運営概要について、組織改編や部会の主要課題について説明した(詳細、資料は第1回自立支援協議会の議事録を参照)。

■主な意見

特になし

- (2) こどもへの支援に関する課題について

■説明(リーダー・事務局)

(1)教育と福祉の連携

他機関との連携に関する現状と課題について協議した。委員より現状、工夫している事項、感じている課題について意見を伺った。

(2)発達に心配のあるこどもの日中活動の場のあり方について

不登校や引きこもりのこども、発達障がいの疑いがあるこども、18歳移行期のこどもに関して、取り組みや課題を協議した。

■主な意見（リーダー：リ、委員：委、事務局：事）

(1)教育と福祉の連携

●現状、工夫している事項

①当事者団体

委：コロナ禍もあり、他の機関と連携はできていない。

②福祉サービス事業者

委：事業者連絡会を実施している。

委：関係機関の特徴をよく知ることが、連携を進める上での第1歩だと思っている。

委：相談員として、サービス提供事業所・行政・病院など様々な機関と連携しながら支援をしている。

委：他機関と問題を共有し、役割分担をしながら実施。立場が違えば、共有するも難しいので、相手の立場や背景を理解した上で話すようにしている。

委：重度の医療的ケア児が保育園へ入園するにあたり、保育園、訪問看護、こども発達センターなど様々な機関と連携をしながら動いた。保護者が積極的に様々な機関に話をしていたことで、他機関と連携がとりやすかった。保護者も巻き込みながら進められれば、連携もスムーズにいくと思う。

委：連携のために、こちらから積極的に他機関等に出向くようにしている。

委：今年度から、こども発達センター主催の児童発達支援連絡会が開催されているので、横のつながりの強化ができると良いと思っている。

委：療育を始める前のこどもに関する連携がとりづらかったが、昨年度から市の母子保健課とも少しずつ連携を深めているところ。

③学校、行政機関

委：特別支援学校の卒業後の生活について、放課後等デイサービスと連携し、今までの支援や今後の支援について情報共有をしている。

委：特別支援学校の進路指導担当が、市や事業所と連携をしている。

委：小学校においては、入学の際にこども発達センターやまなびサポートから情報をもらうことが多い。まなびサポートは、具体的な支援の方法について検討したり、必要に応じて特別支援学校から助言をもらうためにつないでくれることもある。こども家庭支援センターからこどもの情報をもらうこともある。様々な面で課題を抱えているこどもについて、そらいろルームを積極的に利用している家庭も増えていると感じている。その子に合わせた支援ができ

るように、できるだけ連携を図るための会議をするようにしている。

委：学習の面で福祉サービス事業者との連携が必要な場合は、保護者から、一緒に学校と相談をしたいという話があることが増えているので、顔を合わせて話し合うことは重要だと思っている。

委：教育委員会との連携については、内容によって指導課・学務課などを行っている。

委：中学校では、まなびサポートやこども家庭支援センターなどと連携を図りながら、面談や研修などを行っている。県のアドバイザーやスクールソーシャルワーカーも活用している。また、生徒が放課後等に利用している機関とも連絡を取って情報共有をすることもある。

委：関係機関とはなるべく連携するようにしている。保護者を通じて連携する機会も増えている。

委：なんのために連携するのか、はじめに共有することが大事。教育と福祉など、異分野での連携では特に大事と感じる。

委：保護者等になぜ関係機関同士の連携が必要か理解してもらうことが必要。

委：連携が家族にとって必要なことだとしっかり伝えることが必要。連携する情報は保護者、関係機関にとって話しづらい内容もある。

委：高校の中に「高校生活サポート部」があり、特別支援学校を経験している教諭が中心となって、特別な支援が必要な生徒について情報収集や教員間の共通理解を図りながら、指導にあたっている。生徒に関して何か課題がある場合には、積極的に外部（市川特別支援学校・がじゅまる・こども家庭支援センターなど）に相談している。

委：こども発達センターでは、児童発達支援センターとして、こども・保護者・地域に対する支援を実施している。地域機関支援では、市立・私立の保育園や幼稚園を支援している。発達障がいに関する研修では、支援のあり方やこども発達センターでできる支援を現場の先生方に伝えている。現場で困っていることを聞いた場合には、専門職を派遣し、助言をしている。

委：こども家庭支援センターでは、こどもを虐待から守るために、各関係機関に見守りのお願いをしている。保育園・幼稚園、小中高、母子保健課などと心配なこどもの情報共有をしている。子育てケアマネジャーとの連携もしている。他機関に情報を伝える際には、この連携がそのこどもや家族にとって必要であることを伝えるようにしている。家族にとっては話しづらい、取扱いが難しい情報でもあるので、どこまで情報共有すべきか毎回悩みながら行っている。こどもの安全を守るために一緒に関わっていくことを確認しながら連携を進めている。

●課題

①福祉サービス事業者

委：コロナ禍で対面で話す機会が限られるため、十分な情報共有が難しい。

委：関係者に個人情報の確認を取りながら進めると、タイムラグがある。

委：学校と事業者と、打合せ時間をどのように合わせるかが課題。

委：今後、教育だけでなく、母子保健と福祉の連携も強化していきたい。

委：保育園、幼稚園、小学校との連携は年々進んでいるが、初めて出向くところだと、何のため

に来たのか、なぜ福祉が入ってくるのか、理解を得るのに時間がかかることもあるので、より連携を深めていく必要がある。

委：放課後等デイサービスの横のつながりをもっと深めていきたいと思っている。こどもが事業所にいる時間は短いので、他機関でのその子の様子などを共有できたらと思っている。

委：学校、事業所、家庭で本人の様子は違う。どのように共有していくか。

委：オンラインで対応できない場合に、面談等が先送りになっている。

②学校、行政機関

委：特別支援学校は地域の小学校・中学校・高校へ助言や支援をするセンター的機能として位置づけられている。しかし、私立高校の生徒の様子は把握しづらいので、様々な機関と連携しながら、必要に応じて学校への助言や支援をしていきたいと思っている。

委：コロナ禍ということもあり、学校公開の方法を模索しているが、どのように情報発信をしていくかが課題。

委：職員研修を通じて多くの職員の理解を深め、様々な相談機関に積極的に相談しながら、生徒のサポートができると良いと思っている。

委：連携をする前に、連携をする目的や方向性をはじめに共有しておく必要がある。特に教育と福祉の異分野が連携する際には、最初の方向性が一致していないと、支援がかみ合わなくなる可能性もあるのではないかと思う。

委：利用者に「なぜ各機関の連携が必要なのか」を理解してもらう必要がある。利用者が置き去りにならないように連携していくことが大切だと思う。

委：連携の成果を組織でどのように共有していくか、どのようにノウハウを蓄積させていくかが課題。

(2)発達に心配のあるこどもの日中活動の場のあり方について

●現状

こども家庭支援センターより、令和2年度の相談件数について、以下のとおり情報提供があった。

(令和2年度)

虐待に関する相談 415件

その他養護相談・教育相談が313件 ※モニタリングや継続的な見守りを除くと、170件程度

- ・170件の中で多いのは、育児・子育て40件、不登校・登校登園渋り23件、子どもの精神不安・障がいや発達の相談17件など。保護者や学校からの相談が多い。
- ・相談者の障がい手帳の所持者数は不明だが、児童精神科等を紹介する機会も多いが、予約が取りづらいという話を多く聞く。
- ・不登校や登校登園渋りについては、本人と会って気持ちを聞いた上で支援をしている。
- ・家族以外に話ができる存在を増やしていけるように外部の機関と連携もしている。

●課題

①不登校や引きこもりのこどもに関すること

委：通信制高校の7割は不登校といわれている。保護者の不安がこどもにも移っていることがある。心理士によるカウンセリングや講演会を行っているが、そういった場所に出てこない方をどのように見つけていくか、引き出していくかというのが課題。

②発達障がい疑いがあるこどもに関すること

委：1.5歳児・3歳児検診等で発達の遅れの話があったことで、保護者の不安が高まり、今まで行っていた公園等に行けなくなってしまったり、買い物も行けずに、母子で家にひきこもってしまうという相談が実際にあった。

委：相談先が混んでいるために、連絡してから実際に相談できるまでに時間がかかる場合がある。その間に不安が高まったり、さらにコロナ禍であることによって、外に出ることや、周囲との関わりが減っていることで周囲との差を感じてしまい、不安が高まってしまうという話を保護者からも聞いている。

③18歳移行期の課題

委：社会に出るのに自立できることが必要。金銭の面なども課題もある。

委：障がい者手帳を所持していても、福祉サービスを使いたくないという人もいる。困ったときに相談できる場所などの情報を伝えていきたい。

委：居場所を見つけるのが難しい。信頼できる大人がいることを伝えていきたい。

委：支援につながらないこどもには、社会に出る前に「この人に相談すれば良い」というようなキーになる人と結び付けられることが大事。

(3) 令和3年度こども部会の運営とゴール設定について

■説明（リーダー）

会議内容を取りまとめ。リーダー・サブリーダー、会長、副会長と事務局で調整することとした。

■主な意見

特になし

(4) その他（委員や事務局からの報告事項）

■説明（事務局）

事務局より、9月30日に予定していた合同部会の延期と、延期後の日程は追って通知することを連絡した。

■主な意見

特になし